届け 世界の果てまでも

令和２年１０月２３日
No. 42
文責　校長　飯久保一男

かけがえのない大切な存在

「金八先生」のモデルといわている，現在は教育評論家の坂本光男さん（元中学校国語教師）の著書に次のような文章があります。

横山君という男の子は，中学２年のときに病気で亡くなりました。

表情の明るい子で，特に国語が好きで，詩や作文には感動的な作品をたくさん書く子でした。でも，病気のため，中学入学のときはお母さんに車イスに乗せてもらってきました。小学校４年生くらいまでは，スイミングスクールに通って，水泳大会でも運動会でもなかなか活躍したらしいのです。けれどもだんだん身体が思うように動かなくなってきました。それでも横山君は水泳大会にも運動会にも自分が出られないのに，小旗を作ったり，メガホンを作ったりして，真剣にみんなを応援したのです。

６月のある朝，その横山君が亡くなったとお母さんから電話がありました。そして

「ぜひ先生に見てほしいものがあるので，学校へ行く前に寄ってください」

と言うのです。お母さんが一枚の紙を見せてくれました。

「この子がいつ書いたのか分からないけれど，これが敷き布団とマットの間にはさまっていたんです。」

やっと判読できるような文字で，紙にこう書いてありました。

> お母さん，ありがとう。ぼくお母さんの子でよかったよ。もし，このつぎ生まれるときもお母さんの子に生んでよ。
>
> お父さん，ぼくを育ててくれてありがとう。ぼくもっとがんばって丈夫になりたかった。
>
> 友だちみんなありがとう。運動会や水泳大会をぼくもやりたかったな。クラスを勝たせたかったよ。
>
> 先生，作文や詩がいっぱい書けて楽しかったよ。ぼくは小説家になりたかったんだ。
>
> 今度生まれたら絶対になるよ。

お母さんはそれを見せながら

「もっと生き続けさせてやりたかった。先生，他の子どもさんたちに命を大切にするようによく言ってあげてください。うちの子の分まで生きてもらうように話してください。」

と話してくれました。私は，この横山君のことがずっと忘れられません。そして，子どもの自殺事件のニュースがあるといつもこう思うのです。

「横山君は生きたいと思いながら，でも病気で亡くなっていったんだ。子どもたちはみんな生きたい，生きたいと思っているに違いない。だとすれば，その生きたいと思う子どもの気持ちをもっと生かしてやれるような生活をつくり出してやりたい。教育もそうしてあげたい。同時に，生きるということはすばらしいことなんだということも，いっぱい話してあげたい。」

「次に生まれ変わってもお母さん・お父さんの子で生まれたい…」この横山君の手紙は，子どもをもつ親として教員として，強く心に響くものがあります。かけがえのない命，生きていきたいのに生きられなかった命，その命のすばらしさを子どもたちに語っていくのは，私たち大人です。坂本光男さんの詩も紹介します。

ねえ，きみ…

坂本　光男

ねえ，きみ，お母さんを知ってるかい。
きみが生まれたとき，病んだとき
眠らずじっとそばにいて
心を痛めていたのがお母さんだ。

ねえ，きみ，お父さんを知ってるかい。
夜中に，どんなに遅く帰っても
きみの寝顔をそっと見て
黙って床についたのがお父さんだ。

ねえ，きみ，友だちを知ってるかい。
平気でいつも楽しそうだけれど
誰もが一つ以上の悩みをかかえ
こらえながら頑張っているのが友だちだ。

ねえ，きみ，自分を知ってるかい。
たとえ勉強やスポーツが苦手でも
かならず二つ，三つは自慢できるものがある。
それに気づいていないのが自分なんだ。

ねえ，きみ，生きるって知ってるかい。
きみの中にある，その自慢できるものを
どれでもいいから輝かせてごらん。
それがきみにとっての生きることなんだ。

ねえ，きみ，生命（いのち）って知ってるかい。
きみがもし死んだら，親も友だちも泣く。
かけがえのないタカラモノだから
生きられるだけ生きて生命なんだ。

ねえ，きみ，未来って知ってるかい。
どうなるか分からないこれからを
きみの知恵と力できりひらく
そのわくわくする冒険が未来なんだよ。

自慢することなんてないと言う子どももいます。
自分の価値に気づかずに落ち込む子どももいます。
未来への不安を抱えている子どももいます。
一人一人がかけがえのない大切な存在であることを，機会があるたびに伝えていきたいと思います。